ぐるり散策　大月風土記伝説の巻　井上文次郎

四、【子安神社と鬼の伝説浅利式部の鬼退治（賑岡町）】

大月から賑岡町浅利に向かって左手、（新浅利橋対岸の左手）花咲境をなす端山に、松などがしょぼしょぼ立って、南面はきりたった岩壁、頂に小祠があって姥子山と呼ばれている山がある。そこを一名鬼窪山といって、鬼が住んでおり、唱歌の文句にある通り、里に出ては人を食い、若い女をかすめ取るなどの悪行が行われていた。一説には鬼ではあらで工藤祐経（曽我兄弟の仇）の残党が、この地に来て山賊と化したのだとも云うが、いずれにしても鬼畜にひとしい輩がいたのである。その頃、浅利日向の庄に、浅利式部義知とて、壇ノ浦の一戦に遠矢の誉を得た与一義遠の一子とあるからに、その武勇のほどが思われる豪傑が住んでいた。

式部は近隣住民に禍をもたらす鬼退治を思い立ち、まず、家の子中井左京と手勢を二つに分け、一手を浅利の指平（サスビラ）の東北附近から、自分は駒橋より里人を引具して押し出した。

時に大将義知は、わが手練のほどを鬼どもに見せてくれようぞと、白箆（ハクヘイ・矢竹）十四束二つ状を植えたる切鏑矢（キリカブラヤ）に、鵠（白鳥）の霜降羽を割り合わせて剥いた征矢をつがえ、息つく隙もなく射立てた。その弓勢の鋭さは何事にも譬えようもなく、里人は今にその武者振りを記念して、この地に矢向来（ヤゴウラ）の地名を与えているのでも知られている。

さしもの鬼どもも、この弓勢に射すくめられ、次第に東方に矢を避けねばならなくなった。そこに里人はシノギと言っている。

そして腹背に敵を受けた鬼軍は、衆には敵しがたく散々に敗亡、主魁は追われて岩殿山の頂きに追い詰められ、ついにそこで捕らえられてしまった。

式部は岩殿部落に鬼の主魁を引き立てて、そこで首を斬った。

元の賑岡村役場の裏手に赤土と云って、いくら掘っても赤土の尽きない所がある。そこが鬼の斬首された所で、鬼の血が赤くなったと伝える。（筆者も小学生の時、粘土細工の授業の土を掘りに来ている。）

式部が鬼の首を斬った太刀は鎌倉殿（頼朝）より拝領の業物、刀がまだ鬼の首に触れぬうちに、鬼頭はキリキリ舞に上がって西を指して飛んでしまった。

見ていた里人はビックリして、捨てて置いては祟りの種と大騒ぎをして探すと、七保村田無瀬の裏山で発見したとの知らせで、式部が現場に赴くと鬼の首は、まだ歯を食いしばって揺らいでいたから、のちにこの地をユルギと言った。

さて、首を持ち帰って公衆に見せておくと、鬼の手下が来て盗んでいってしまった。この手下はいささか人間並みに利巧の者だったとみえ、親分の首を葛籠に入れて持ち歩き、日影入りの勘蔵部落に来て宿を求めた。現在のウンニヤードという屋号の家がこの鬼を泊めた家だという。（これはあくまで伝説）したがって鬼宿と書くのが正しいと伝える。

翌日は西奥山へ入ろうと峠道にかかると、葛籠が重くなってどうしても歩けない、仕方なく葛籠を捨てた所が、今のトズラ峠である。

この葛籠はのちに日影の上手の某が持ち帰り、蓋を開けてはいけないと開けずにおいたら、みる家は富み長者になってしまい、後日開けて見ると中は何もなかったばかりか、すっかり福払いになって悔しがって日影の横バリへ捨ててしまった。横バリとは厄払いの訛りであると、この一夜長者の子孫は現存しているやは定かでない。

鬼の手下は、峠を越して現在の遅能戸部落へ入って、里人をたばかる手段として、こんな事を触れ歩いた。

「わしは鎌倉の住人でござる。私主人アニ尼様は、故あって鎌倉殿に崇りをなしたるトガにて打首に相成ったけど、アニ尼様はそのような不埒な御方様ではござらぬ。生前に善を積み、慈悲を下々に垂れさせられた結構な御方様じゃ、これなる首を拝する輩は来世は極楽、これを祀り拝する者には子宝を授けようぞ、子を産む者には安産を得させるとお告げがある。まった、この流れの水を飲む者は誓ってお産で死ぬことはござるまい。」

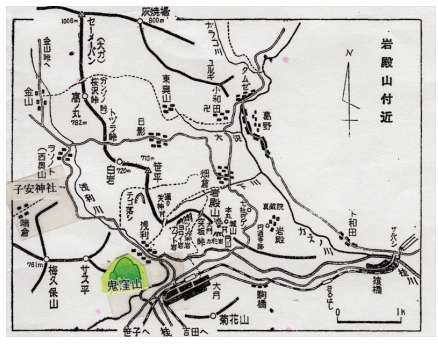
この有難そうな言葉を真に受けて、祠を立てて祀ったのが、今の子安明神（宮澤神社）である。鬼の頭を祀ったから、オニノトウ、これが転じてオソノトの地名が生まれたのである。

式部が鬼を斬った日が三月十一日、浅利の射手が十一名、浅利部落が十一組、村社　神田神社の祭礼が三月と八月十一日、浅利と十一の因縁は不祥である。

註　子安神社は、古くから子育明神と称せられ、安産を祈願する妊産婦、子宝を得てお礼参りの参詣者が、非常に多く、市内・県内はもとより、遠く東京・神奈川にまで及ぶ。また境内にある子安子育の杉は、二つの幹がくっついていて高さ約三十五米、母親の子を抱く姿に似ているため子育ての杉といわれている。妊婦が神社に参詣してこの神木の杉皮を剥いで晒布に包み腹に巻けば、安産疑いなしと信じられていて参詣者が今も多い。創建は、平安時代といわれ、祭神は木の花咲耶姫。平安時代富士山の噴火を鎮めるため祭神に。

五、山の伝説【万燈山（富浜町）】

宮谷と鳥沢の入会山境界字西山の地に、明治初年に至るまで、麓から山頂に及んで陰暦七月一六日の夜、一列に松明を点じ、あたかも万燈を連ねたようにした風習があり、人呼んで万燈山と称した。



春夏例祭の御礼詣り、東京・神奈川から

参考文献
大菩薩連嶺
子安神社縁起

執筆者　井上　文次郎

十二月号へつづく…